

《インタビュー記録》

## 歴史教育体験を聞く

藤井千之助先生

日 時：2005年2月28日

場 所：広島県広島市佐伯区

聞き手：田中泉・鈴木正弘・茨木智志

### はじめに

「歴史教育体験を聞く」のインタビューを、藤井千之助（ふじい せん の すけ）先生がお引き受けくださった。藤井先生は、戦争が終わった直後から、長く高等学校の教師として世界史などの授業を担当され、その後、広島大学・広島経済大学等で教鞭を執ってこられた。その間に、世界史をはじめ社会科の、多くの教科書や書籍を執筆されてきた。高校の世界史授業で使用されている図説や資料と呼ばれる副教材の原型をお作りになったのは、藤井先生である。また歴史意識に関する広範な研究をまとめられた方としても、よく知られている。

今回のインタビューでは、藤井先生をよくご存知の広島経済大学の田中泉先生にもご参加を頂き、お話を伺うことができた。

以下は、藤井千之助先生のインタビューの記録である。

### 1. 小学校から中学校

一（茨木） 藤井先生のお書きになった『歴史意識の理論的・実証的研究』を大学院の授業で使わせていただきました。そのときのレポート集をお持ちしましたので、後程、ご覧いただければと存じます。本日は、戦後間もなくの頃を中心とした、先生のご体験を伺いたく存じます。まず、藤井先生の生い立ちから、小学校でお受けになった歴史教育のことを中心にお聞かせください。

私は1922（大正11）年に現在の広島県府中市府中町（当時は芦品郡府中町）に生まれました。

ごく小さいうちから自宅近くの幼稚園に通いました。幼稚園はとても楽しかったのですが、まだ幼稚園の教育内容が整備されていない時期であったらしく、翌年になっても、前年と同じことをさせられて、すぐに飽きてしまいました。そのため、

おもしろくなく、人のじゃまばかりしていたところ、しまいには〈放園〉させられました。仕方なく、私は、毎日のように、近くの本屋に通って、長い時間、立ち読みをしていましたが、そこからも追い出されてしまうような子どもでした。

1927（昭和4）年に地元の小学校<sup>1</sup>に入りました。1年生の初めの頃の修身の授業のことをよく覚えています。修身の授業は、担任の先生ではなく、教頭先生が特別に担当されていました。4月の天長節<sup>2</sup>に関わって、教頭先生が、教育勅語について、かいつまんで話しをされると言われました。私はそれを聞いて、「教育勅語はみんな知っとる」と叫びました。実は、『幼年倶楽部』や『少年倶楽部』<sup>3</sup>を読んでいたが、『少年倶楽部』の附録に教育勅語があり、父がそれに振ってくれた片仮名で読んでいるうちに暗記していました。そして私は、得意になって、教育勅語の全文を、「ぎょめい ぎょじ（御名御璽）」まで一気に暗唱して見せました。しかし、意味を問われて、全く答えられず、「ただ覚えているだけでは、だめだ」と、教頭先生から言われてしまいました。

そういえば、『幼年倶楽部』や『少年倶楽部』は、ずいぶん読みました。山中峯太郎<sup>4</sup>の「敵中横断三百里」とか、平田晋策<sup>5</sup>の「日米もし戦わば」式の話などが出ていたときでした。樺島勝一<sup>6</sup>の絵なども、付いていたのを覚えています。このように子ども向けの雑誌を含めて、世の中が、戦争、戦争の時代でした。

－ 当時の出来事を何か記憶されていますか。

満州事変（1931年9月）が起こったことは、覚えています。小学校2年生のときでした。このことについて、学校で、先生から何か話をされた記憶はありません。ただし、新聞は、連日、大きく取り上げていましたし、周りの大人も話題にすることも多かったためか、小学生であった私も、リットン調査団（調査は1932年3月～6月）は、日本がしていることに、何を文句言いに来たのだろうと、子供心に思っていました。正直に言って、当時は、何がなんだか、分かりませんでした。

－ 国史の授業はどのようなものでしたか。

---

<sup>1</sup> 広島県芦品郡府中東尋常高等小学校、現・広島県府中市立東小学校（広島県府中市府中町）。

<sup>2</sup> 4月の天長節：天皇の誕生日である天長節には校長が全校生徒の前で教育勅語を「奉読」する儀式が戦前には行われていた。なお当時の天長節は4月29日（現・みどりの日）であった。

<sup>3</sup> 『幼年倶楽部』『少年倶楽部』：大日本雄弁会講談社による幼児向け、児童向けの月刊誌。

<sup>4</sup> 山中峯太郎：1885～1966年、作家。「敵中横断三百里」は『少年倶楽部』1930年4月～9月号に連載された。

<sup>5</sup> 平田晋策：1904～1936年、作家。「昭和遊撃隊」が『少年倶楽部』1934年1月～2月号に連載された。

<sup>6</sup> 樺島勝一：1888～1965年、画家。「敵中横断三百里」の挿絵等を描いた。

小学5年から国史がありました。歴史を教えてくださいました先生は、広島師範学校を卒業された、真面目な好い方でしたが、ご自身が神主さんでしたし、内容的には、いわゆる戦前の皇国史観の教育を受けました。当時は、そういうものかと思って聞いていました。

その後、私が広島高等師範学校に進学してからのことですが、その先生が宿直のときに母校を訪れたことがありました。そのとき、先生に向かって、自分の受けた歴史の授業は間違っていたと言って、ずいぶんと食って掛かりました。今から思えば、当時は世の中がそういうものでしたし、先生ご自身がご存じなかったのも当然のことだと思います。このとき先生からは、「あんまり、そういうことは、他所では言うなよ」と注意されました。

ー 中学校での歴史の授業はいかがでしたか。

1935（昭和10）年に広島県立府中中学校<sup>7</sup>（旧制）に入学しました。

中学校では、服部久男先生の歴史の授業を受け、とても影響を受けました。先生は何でもよくご存知で、立て板に水の如くの実に見事な歴史の授業をされていました。のちに一高・東大に進んだ、親友の青山行雄氏と、私は、ひとつ服部先生を困らせてやろうということで、2人で協議して、いろいろと難しい質問を用意して授業に臨みました。しかし、何度がんばっても、全く歯が立ちませんでした。中学卒業後に、奈良師範学校（現・奈良教育大学）に異動された服部先生を訪ねていったときに、このことをお話したところ、「授業前に鰻を食べて、口のすべりをよくしてから、授業に臨んでいたんだ」と笑いながら、おっしゃっていました。自分が歴史を目指すようになったのは、服部先生の影響が大きかったと思います。服部先生の後任に、文検<sup>8</sup>を通った先生が着任されましたが、我々の質問には全く答えられない状態でした。そのため、あまり真面目に授業を受けなくなってしまいました。

## 2. 広島高等師範学校

ー その後、先生は高等師範学校に進まれるわけですが、当時のことで印象に残っていることをお聞かせください。

1940（昭和15）年に広島高等師範学校<sup>9</sup>の文科第三部甲に入りました。甲という

---

<sup>7</sup> 広島県立府中中学校：現・広島県立府中高等学校（広島県府中市出口町）。

<sup>8</sup> 文検：戦前を中心に行なわれていた「文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験」。

<sup>9</sup> 広島高等師範学校：現・広島大学。なお広島大学は、1949年に広島文理科大学、広島高等学校、

のは歴史公民科で、同級生は10人でした。乙は地理歴史科で、20人でした。後に同僚となる永井滋郎<sup>10</sup>氏は、乙でした。国史は梅田育太郎先生、東洋史は浦廉一先生、西洋史は八幡元雄先生がいらっしゃいました。

入学した年が、いわゆる「紀元は二千六百年」という年（1940年）でした。この頃から、だんだん疑問を持ち始めました。神武天皇からの歴代天皇の名前を、中学時代には、すべて覚えていました。それが、どうもおかしいと思うようになったのは、高等師範に入学してから使うようになった三省堂の年表<sup>11</sup>が、きっかけでした。年表を見ると、はじめの10人ほどの天皇が皆100歳を越えています。いかにも不自然に感じました。この疑問を、梅田先生に質問したところ、江戸時代から様々な見解が存在すると、詳しく説明してくださいました。今から思えば、時代が時代です、核心に触れるところを明言されていませんでしたが、よく記憶しています。1941（昭和16）年ごろのことです。

それから文科第三部には、アジアからの留学生が「満州国留学生」として勉強していました。金英熙、史鶴永、緒会賢の3氏です。金英熙氏は、戦後も日本で活躍していたのを、後のクラス会で知りました。緒会賢氏は、内モンゴルから来たモンゴル人でした。当時、私は、毛沢東の名を、彼が書いたもので、初めて知りました。ある日、下宿に帰ると、見知らぬ人が私の部屋に座っており、いきなり「君は、緒会賢を知っているか」と聞かれました。その人物は、特高<sup>12</sup>でした。「緒会賢は、中国共産党の指令を受けたスパイである」と言われ、驚きました。私には、「彼は、真面目で、朴訥な留学生である」としか答えられませんでした。太平洋戦争勃発の直前に、緒君の姿は忽然と消えました。当時の主任教授であった浦先生が、「緒君は、もう姿を見せないだろう」と言われました。その後の消息は、今もって全く分かりません。

高等師範学校は、4年間であるはずでしたが、戦時短縮で2年半となったために、3年生の半ばで繰り上げ修了になり、広島文理科大学に進学しました。そのため、私は、教育実習をしませんでした。

### 3. 広島文理科大学史学科東洋史学専攻

— 広島文理科大学では、なぜ東洋史専攻を選ばれたのですか。

---

広島工業専門学校、広島高等師範学校、広島師範学校などを包括して設置された。

<sup>10</sup> 永井滋郎：1921年生まれ、西洋史・国際理解教育専攻。

<sup>11</sup> この年表は、三省堂編輯所編『模範最新世界年表』（三省堂、1921〔大正10〕年10月初版、1940〔昭和15〕年10月4訂新版274版）である。「日本」「朝鮮」「支那」「西洋」を対比的に配列した世界史年表となっている。

<sup>12</sup> 特高：内務省直轄の特別高等警察。強力な権限のもとで政治・思想に対する徹底的な取締りを実行した。

1943（昭和17）年10月に、広島文理大の東洋史に入りました。東洋史学研究室には、杉本直治郎<sup>13</sup>先生、鴛淵一<sup>14</sup>先生、今堀誠二<sup>15</sup>先生がいらっしゃいました。同級生の永井氏は、西洋史に進みました。私が東洋史に入った理由は、日本史は何かおかしいと感じていましたし、時代の雰囲気もありまして、アジアの歴史を研究したいと思ったからです。最終的には、中国史になります。杉本直治郎先生は、後に、私たちの仲人をしていただいた先生でもあります。

今堀先生は、外務省派遣として中国の北京師範大学で教鞭を執られていましたが、ちょうど帰国されたばかりでした。私は、今堀先生の講義「支那近世結社の研究」に、大きな影響を受けました。先生は、後にギルドの研究で、学士院賞をお取りになります<sup>16</sup>。

一 広島文理大から海軍に入られて、敗戦を迎えられたと伺っていますが、その間の様子をお聞かせください。

私が入学した1943年10月に、大学生の徴兵延期の停止が決定し、12月には、全国の大学で学徒出陣となりました。それにもかかわらず、文理大の学生は、入営延期になっていました。それは、軍の学校の教官要員として、残されたためでした。そのため、文理大入学後、1年間は、普通に授業が行われていました。

1944（昭和19）年の秋ごろからは、勤労働員の合間に授業があるような感じになりました。このころ、杉本先生の高丘親王伝研究<sup>17</sup>の校正のお手伝いをしました。その後、文理大の理科の学生は入営延期のまま、広島に残り、私たち、文科の学生は入営延期が停止されて、1945（昭和20）年5月に入営となりました。そのため、私は原爆（8月6日）には遭いませんでした。

私は、千葉県館山海軍砲術学校に入り、海軍予備学生として訓練を受けていました。その後、神奈川県横須賀海軍砲術学校に移りました。横須賀の空襲<sup>18</sup>は、実にひどいものでした。ここで、ある日、集められて聞いたのが「玉音放送」（8月15日正午）でした。雑音がひどく、よく意味が分かりませんでした。これで終わったということだけは理解できました。その後、なんとか復員列車で広島県の福山

---

<sup>13</sup> 杉本直治郎：1890～1973年、東洋史専攻。

<sup>14</sup> 鴛淵一：1896～1983年、東洋史専攻。

<sup>15</sup> 今堀誠二：1914～1992年、東洋史専攻。

<sup>16</sup> 今堀誠二『中国封建社会の構造—その歴史と革命前夜の現実—』（日本学術振興会、1978年）により1980年学士院賞受賞。

<sup>17</sup> このときの原稿は東京大空襲で消失。戦後になって杉本直治郎『真如親王伝研究：高丘親王伝考』（吉川弘文館、1965年）として発行された。

<sup>18</sup> 横須賀の空襲：1945年7月18日の艦載機約3000機による空襲。

駅に帰りました。

在学中の入営でしたので、9月には形式的に卒業となりましたが、私は家に居り、卒業式には参列しませんでした。

#### 4. 高等女学校勤務

一 履歴を拝見すると、敗戦直後に女学校にお勤めになっていますが、当時の学校の様子はいかがでしたか。

1945（昭和20）年11月から、広島県立府中高等女学校<sup>19</sup>に「教師」として勤めました。「教師」というのは職名です。私が海軍の学校に在籍していたため、軍歴資格審査の必要があると言われ、1年ほど経って、教官になりました。今で言うと、非常勤のような扱いでしたが、仕事の内容に違いはありませんでした。

着任して、専門の東洋史の他に、英語や地理も担当させられました。墨塗りをさせた記憶はありません。地理は12月に停止されて、授業ができなくなりました<sup>20</sup>。地理はあまり勉強していなかったため、偏西風が吹く理由を質問されて、うまく答えられず、困った思い出があります。そういえば、修身・日本史・地理の三教科の停止指令にかかわって、ある日、校長が校内にある、三教科に関連したすべての本を出させて、廊下に積み上げさせていました。どうするのかを尋ねたところ、進駐軍の命令により焼却<sup>21</sup>するとのことでしたので、そこから相当量の本を自宅に持ち帰ったことがありました。

一 東洋史はどのような授業をされましたか。また教科書は何を使用されましたか。

終戦の年の東洋史はなにをやったのか、あまり記憶にありません。その後も東洋史を担当しましたが、私は、当時、教科書を使いませんでした。また、後には学習指導要領も読みましたが、あまり参考にせずに、有高巖<sup>22</sup>先生の本などを自分なりに噛み砕いて授業を構成していました。

1947（昭和22）年9月に社会科が始まります。そこで、社会科が始まる前の小中学校の伝達講習会や、奈良女子高等師範学校（現・奈良女子大学）での講習に、積

---

<sup>19</sup> 広島県立府中高等女学校：現・広島県立府中高等学校（注7参照）。

<sup>20</sup> 1945年12月31日「修身、日本歴史及び地理停止ニ関スル件」の指令。

<sup>21</sup> 三教科停止に関わって、当該教科の戦時中の教科書の回収が命令されたが、関連するすべての書籍の回収・焼却の命令は、総司令部から出されていない。しかしながら地域によっては本文に記されたような「命令」が出されたこともあった。島根県の事例は、藤原治『ある高校教師の戦後史』（岩波書店、1974年）28頁以下の「混乱の中 2 図書とりかえし」に詳しい。

<sup>22</sup> 有高巖：1884～1968年、東洋史専攻。

極的に参加しました。奈良女高師での文部省主催の講習会では、重松鷹泰<sup>23</sup>氏が社会科東洋史の講師でした。重松氏は熱心に説明をされていましたが、東洋史のことは、あまりご存じないようでした。私は、一番前の席で話を伺い、「お話の趣旨から考えると、現代から、時代をさかのぼって進めていく、倒叙法による授業が望ましいのでは」と質問をしました。重松氏からは、「可能ならば、それが望ましい」旨の回答をいただきました。

9月から始まった社会科東洋史の授業では、「太平洋戦争で、なぜ日本が負けたのか」、また「負けるような戦争を、なぜやったのか」、こういうことを私が話して、生徒に自由な討議をさせることから始めました。そして、中国に対する自分の考えを書かせ、それを私が読んで補足説明をする。このような形で、現代から時代を遡っていくような授業をしました。ずっと後、当時の生徒たちのクラス会に呼ばれたときに、当時50歳を超えていた卒業生たちが、「あのときの授業は、とても感銘深く、はっきりと覚えています」と言ってくれました。このような授業は、現在でも、簡単には出来ないでしょうね。

この年の秋に、別の高等女学校で地理教師をしていらした阿部正道<sup>24</sup>氏とめぐり合い、社会科教育の談義に花を咲かせたことも、いい思い出です。阿部氏は、最後の福山藩主・阿部正桓<sup>25</sup>伯爵の孫に当たられる方で、東京の成蹊高校（旧制）から京都帝国大学で地理を専攻し、戦後になって、一時、福山にお住まいになっていたときでした。私の家に訪ねて来られたこともありました。

## 5. 広島大学附属高校勤務

— 広島大の附属高校に異動されたのは、この頃ですか。

1948（昭和23）年4月から広島高等師範学校附属中学校・高等学校<sup>26</sup>に移りました。書類上は、5月からに、なっています。広島文理科大学の学長でいらした長田新<sup>27</sup>氏から辞令をもらいました。当時は、学校の建物も建てかけでした。

話は、これより以前のことになります。日本社会党（現・日本社会民主党）の創設に関わっていた森戸辰男<sup>28</sup>氏が、戦後初の総選挙（1946年4月）で当選される

---

<sup>23</sup> 重松鷹泰：1908～1995年、教育学専攻。

<sup>24</sup> 阿部正道：1917年生まれ。

<sup>25</sup> 阿部正桓：1851～1914年。

<sup>26</sup> 広島高等師範学校附属中学校・高等学校：現・広島大学附属中学校・高等学校。同校は、その後、幾度かにわたり校名を改めているが、ここでは以下、「附属高校」と表記する。

<sup>27</sup> 長田新：1887～1961年、教育学専攻。

<sup>28</sup> 森戸辰男：1888～1984年、社会科学専攻。1920年に筆禍事件で有罪となり（森戸事件）、戦後は文部大臣、広島大学長、中央教育審議会会長などを務めた。

前に、府中中学での講演で、中等学校教員の組合結成を力説されたことがありました。そのような中で、私は、翌年の 2・1 スト<sup>29</sup>のときには、組合の闘争委員をしていました。たびたび府中から広島市などに行っていましたが、ある時に電車で、中学の先輩で、附属高校にいらした英語の田辺昌美<sup>30</sup>氏と一緒にになりました。話の中で、田辺氏から、「そんなことをしていたらだめだ、君はもっと勉強をするように」と言われ、附属高校に来るようにということになりました。

一 当時の附属高校での授業は、どのような形のものだったのでしょうか。

附属高校に移った当初は、私も新しく入ったばかりでしたので、中学の一般社会と高校の時事問題<sup>31</sup>を担当しました。

高校の時事問題は、教科書もなく、教師に自由に任されていたため、私にとって、とても印象深いものです。2・3 年生を一緒にしての授業でした。大雑把に言うと、一学期は政治、二学期は経済、三学期は文化・社会という構成を立てました。はじめに黒板に現在、どういう問題があるかを生徒に言わせ、板書して、生徒が自分の担当の課題を選びます。生徒は、数人が班になって分担して調べたり、一人で調べたりする場合もありました。授業は、調べた結果を、生徒がガリ版で資料を作って発表して、討論を行い、私が最後に批評するという形のものでした。週 5 時間というのは、ほとんど毎日が違う授業ということで、正直に言って、とても大変でした。

ごく一部ですが、当時のガリ版の資料が、手元にあります。〔以下、資料を前にしての説明。〕ここには、「高校 時事問題 経済 昭和 24 年 2 学期」と書かれています。この資料の綴りは、のちに銀行の支店長をしていた小西忠昭君という卒業生が持っていたものを譲り受けたものです。この中の「計画表」には、賠償問題、金融財政問題、貿易問題、企業合理化問題、労働問題、人口と資源の問題、経済思潮などがあります。先ほど述べたように、これは、生徒に問題をあげさせて黒板に書き、選ばせました。各自の資料には概観、参考資料、経過、原則、概略などをまとめさせました。生徒も相当に苦勞して作ったものでした。この「シャープ勸告」の発表文は、字体を見れば分りますが、ガリ版屋に出して作ってもらったものですね。また経済史や経済思潮を担当した生徒の資料は、実によく調べられた発表ですが、この発表者の池本清君は、後に神戸大学の経済学部長になった人です。このような資料を使って、生徒に発表させて、議論をさせ、最後に私がまとめや補足をしました。これらの資料は、教師である私が事前にチェックして、書き直させることもありま

<sup>29</sup> 2・1 スト：1947 年 2 月 1 日に計画された公務員・労働者による全国一斉のストライキ。前日に占領軍の命令により中止された。

<sup>30</sup> 田辺昌美：1919～1980 年、英文学専攻。

<sup>31</sup> 中学の一般社会と高校の時事問題：当時の中等社会科は基本的に、中学 1 年から高校 1 年までの「一般社会」と高校 2・3 年の「時事問題」などの 4 つの選択科目で構成されていた。

した<sup>32</sup>。

- 一 発表の資料を拝見すると、現在の大学生のレベルだと思いますが、授業の進め方などは、当時の学習指導要領や教育雑誌などを参考にしたのでしょうか。

この方法は、自分で考えたものです。また、ところどころに、教師である私の発表が入っています。「新民主主義の経済綱領と経済政策」などは、私の発表です。中国研究所から来た資料を基にして作ったものです。ある生徒から、中国共産党の李立三<sup>33</sup>のことを、進学した慶応大学経済学部で、誰も知らなかったと言われたことがありましたので、斬新な授業であったのでしょうか。

- 一 中国研究所から藤井先生あてに資料が送られてきていたのですか。

東京に平野義太郎<sup>34</sup>氏が作った中国研究所（社団法人）というのがありました。私が附属に移る前に、この中国研究所の具島兼三郎<sup>35</sup>氏が来て話をしました。そのときに色々質問したところ、具島氏から中国研究所に入るように勧められました。私は、東京に行くことはありませんでしたが、それ以来、資料が大量に来るようになりました。当時、中国の資料は少なく、時事問題の授業で大変に役立ちました。

- 一 中学の一般社会はどのような授業をされたのですか。

中学の一般社会では教科書はありましたが、基本的に、先ほど述べた時事問題の授業と同様の授業を行いました。私が附属高校に移った年の1948（昭和23）年、中学2年E組の「交通機関の発達はわれわれの生活をどのように便利にしているだろうか」単元の資料が手元にあります。この授業を受けた生徒たちも、もう70歳ぐらいになっています。「鉄道業務の組み立て」「広島市の交通機関」などの発表がありました。広島だけでは比較の対象がないと言って、東京まで調査に行った生徒もいました。また、水産資源を取り上げたときは、捕鯨を調べるために下関まで調べに行った生徒もいました。

当時の生徒たちは、この授業は忘れられないと語ってくれました。初期社会科に

---

<sup>32</sup> 藤井氏による「時事問題」実践は、黒澤英典(他)著『高校初期社会科の研究－「一般社会」「時事問題」の実践を中心として－』（学文社、1998年）において、朝倉隆太郎・豊田吉徳・永田照夫の実践と共に、高校での初期社会科実践の形成過程として取り上げられている（92～94頁、和井田清司執筆担当）。

<sup>33</sup> 李立三：1899～1967年、中国共産党の指導者の一人。

<sup>34</sup> 平野義太郎：1897～1980年、法学専攻。

<sup>35</sup> 具島兼三郎：1905～2004年、政治学専攻。

は、批判も色々ありましたが、要は、やりかただと思います。このような時事問題や一般社会の授業が、私のその後の歴史の授業や歴史意識調査などにつながっていたと思います。

－ 初期の頃の社会科教育で、印象に残った出来事は、他にございませんか。

附属高校の社会科教官が共同で、『社会科事典』<sup>36</sup>という社会科学習のための資料集を作りました。出版社は、大阪の湯川弘文社というところでした。執筆するにしても、材料が何もありませんので、参考資料を手に入れるための編集費として、5万円を受け取りましたが、当時は百円札ですから、これを大阪から二人がかりで運びました。1948（昭和23）年の夏に執筆し、翌年3月に発行したものです。広島高等師範・文理大の学生が、見本を持って帰省して全国から注文を取って帰ったこともあり、検印するのを学生にアルバイトで頼むほど、売れに売れました。後に東京の知人から、「箱根を越えて、関西からの出版物が、東京で売られたのは、『社会科事典』が、戦後では初めてだ」と言われました。印税もたくさん入ったため、附属高校の他の先生が、主事（校長）ですら、まだ軍服を着ているときに、我々だけは背広を着るようになりました。私は、そのときビクターの何万円もするラジオを買いました。そんなことが思い出されます。

また、1950（昭和25）年頃、附属高校の生徒が「社会科学研究会」を設立しようとして、私に相談をしてきました。ところが附属高校の教官の猛反対を受けて、希望がかなえられませんでした。私は名称に難があると考えまして、「ユネスコクラブ」と改めるように助言して、それが通りました。その後、1953（昭和28）年に、東京教育大学（現・筑波大学）附属中学・高校などとともに、ユネスコ教育実験学校に指定されたときには、私の後に着任していた同級生の永井滋郎氏が、担当となりました。永井氏は、その後も国際理解教育の研究を進められました。

## 6. 世界史教育のこと

－ ご専門の世界史教育についてお聞かせください。

附属高校では昭和20年代から昭和49年（1974年）まで世界史を中心に授業を行ってきました。これまで述べたように、当初は、私も新しく着任したばかりだったので、一般社会と時事問題を担当していました。また1950（昭和25）～1952（昭和27）年に病気をしましたので、世界史が始まった1949（昭和24）年前後の通達などは、あまり記憶にありません。世界史については、ずいぶん勉強をしました。

---

<sup>36</sup> 広島高等師範学校附属中学校社会科学研究会編『社会科事典』湯川弘文社、1948年。

西洋史の永井氏と東洋史の私は、夜遅くまで、お互いに切磋琢磨したものです。このときの努力は、教科書を書いたり、参考書を作成したりするのに役立ちました。

登場したばかりの世界史のために、千代田謙<sup>37</sup>先生の教科書（三省堂）とか、杉本直治郎先生の教科書（講談社）とか、広島史学研究会の教科書<sup>38</sup>などが出てきました。私は、1949（昭和24）年の広島史学研究会の教科書作成に関わりましたが、翌年に発行されたこの教科書を、私自身は入院していたこともあり、授業では使っていません。その後、自分たちで世界史B<sup>39</sup>教科書を作りました<sup>40</sup>。東京の神田神保町にあった修文館からでした。その後、著作権は第一学習社に移り、ここから改訂版を発行しました。

— 藤井先生が手がけられた歴史意識の研究<sup>41</sup>は、どのようなきっかけで始められたのでしょうか。

歴史教育は、単なる歴史的事実を暗記させるだけでは、いけないということ、歴史に対する立ち向かい方や、歴史をどう捉えるかということを追及し、主張すべきということ、これらが私のその後の研究の主要な方向になりました。先に述べたユネスコの実験での調査も、その基礎の一つになっています。当時、歴史意識の調査が盛んに行なわれていましたが、そのすべては横断的調査法のものでした。

私は、高校生の歴史意識の現状が、大都市・中都市・農村漁村でどのように異なるか、を調査しました。この調査は、学会を通じて、全国の方々の援助の下に行われました。さらには、アメリカ合衆国の高校生と日本の高校生とはどのように違うのかを、1971年に訪米した際に、米国インディアナ大学メーリンガー教授（当時はインディアナ大学教育学部長）の援助で、調査を行ないました。この中で、当時の日米高校生の意識の相違が、特に戦争、平和、国連などについて、かなりはっきりと出てきました。当時の朝日新聞やジャパン・タイムズに、その結果が報ぜられました。

私は、これまでの横断的な調査方法の問題点に気付き、縦断的な調査方法もめざしました。幸い、私は当時、大学附属の中学・高校で授業を持っていたこともありました。生徒たちの中学校での歴史に対する考え方が、高校・大学、さらには大学卒業後にどうなるのかを調査しました。そして変容していれば、大学の講義によるも

---

<sup>37</sup> 千代田謙：1899～1980年、西洋史専攻。

<sup>38</sup> 広島史学研究会『世界史研究』上・下、柳原書店、1950年。なお、この教科書は検定教科書ではない。

<sup>39</sup> 世界史B：1958年版の高校学習指導要領では、3単位の世界史Aと4単位の世界史Bの2種類が提示されていた。

<sup>40</sup> 高山一十、今堀誠二他4名『世界史B』修文館、1964年（1967年改訂版）。

<sup>41</sup> 藤井千之助『歴史意識の理論的・実証的研究』風間書房、1985年。

のか、本人の読書などによるものかを調査しました。年を追うごとに、回答をしてくれる人数は減りましたが、色々なことが判明しました。

もう一つの調査研究方法は、ある共通の刺激を学習者に与えて、それによる学習者の変容を調べるというものでした。朝鮮についての学習に関連して、ユネスコの資金から、金達寿氏の著書<sup>42</sup>を全員の生徒に渡して学習しました。このような調査方法では、生徒の意識の変化も見られましたが、特に情緒的な側面は、なかなか変化しなかったように思います。いずれにしても、他の人がやられていなかったことに取り組んだものと自負しております。

ー 現在、流布している世界史図表の基礎となる形式の嚆矢は、藤井先生が編集されたものと存じますが。

永井氏とともに、世界史図表も 1969（昭和 45）年に初めて作りました<sup>43</sup>。これは地図や年表に様々な写真や図を加えたものです。独創的なものをいかに作るかに腐心しました。また自由自在という参考書<sup>44</sup>や多くの問題集も作成しました。

附属高校から広島大学（1974～1986 年）、松山商科大学（松山大学、1986～1989 年）そして広島経済大学（1989～1997 年）と教える場は変わりましたが、常に歴史や歴史教育に取り組んできました。私の歴史の授業は、1999 年度の広島経済大での「中国史における農民反乱」の講義まで続きました。

ー 藤井先生は海外との教育交流に努められる中で、特に中国との交流を重ねられています。印象に残った出来事はございますか。

何度か招請を受けて、中国を訪問しましたが、特に 1985（昭和 60）年 11 月のときのことが思い出されます。このときは北京師範大学で教官、研究生の約 50 人を前に、「日本における社会科教育の変遷と展望」というテーマで講演をしました。私の話の後に、色々な質問がありました。その中に、あちらの教官のかたから、中曽根総理大臣（当時）が靖国神社に公式参拝したこと<sup>45</sup>に関連して、「これに対する藤井先生のご見解は、いかがでしょうか」という質問がありました。

これには、さすがに困りました。私は、「いい質問です」と前置きした上で、「私は、広島大学の教官である国家公務員です。国家公務員の最高の地位は、総理大臣

---

<sup>42</sup> 金達寿『朝鮮：民族・歴史・文化』岩波書店、1958 年。

<sup>43</sup> 『世界史図表』第一学習社、1969 年。

<sup>44</sup> 増進堂・受験研究社の『世界史自由自在（高校用）』（1969 年）および『社会科自由自在（中学用）』（1955 年、1961 年全訂）。

<sup>45</sup> 1985（昭和 60）年 8 月 15 日、中曽根康弘首相が戦後の歴代内閣で初めて靖国神社への公式参拝を行なったこと。各方面からの批判により翌年は見送られた。

です。私にも個人的な意見はあります。しかし、このような公の場で、しかも中国で、私の個人的な見解を述べることは出来ません」と答えたところ、「分かりました」と言ってくれました。私は、この質問で、問題の難しさを知りました。

その後、中曽根首相が中国に行きますが、中国に行ったら必ずこのことを言われるから、答えられるように十分に準備して置くようにと当時、首相訪中にかかわっていた知人に忠告し、感謝されました。

この質疑応答は、忘れられない思い出です。ただし、日中の関係はこのときよりも、現在の方がよくないような気がします。

－ 最後に、歴史教育をはじめ、現在の教育について、お考えをお聞かせください。

私が以前から主張していることですが、大学入試問題を大学の各教官が作成することが大切です。今は、大学入試センター試験が行なわれていますが、共通一次試験<sup>46</sup>の時代から、この観点で反対してきました。当時の永井道雄<sup>47</sup>文部大臣にも、止めるように主張したことがありました。人の作った問題を、そのまま使うような状況が、高校の教育や大学の教育を、悪くしている元凶だと思います。大学の教官が熱心に問題を作れば、教科書も見ますし、高校の教育のことを考えますが、自分で問題を作らなければ、それはありません。また一方で、高校の先生も出来合いの入試問題に合わせた授業になってしまいますし、生徒も同じです。共通一次試験以前も、一期校・二期校の問題はありましたが、それ以上に、自主性を無視する画一的な体制にしてしまい、今に至っています。

歴史などの授業についても、もっと柔軟に多角的に進める必要があります。IT (Information Technology) とかは、古い自分には分かりませんが、もっと自分で調べたり、書いたりするようなことが出来ないものだろうか、常に思っています。すぐに変わる教育政策にも問題があります。私自身は、ヨーロッパ中心ではなく、なおかつ歴代中国史でもない、これまでと違った形の世界史の授業を行いたいという気持ちを持って、教師を続けてきました。しかし今の時代、このような授業では、センター試験とかは通らないでしょうね。

－ 本日は、長い時間、ありがとうございました。

---

<sup>46</sup> 共通一次試験：1979年度～1989年度に実施された国公立大学の入学試験。

<sup>47</sup> 永井道雄：1923～2000年。1974年12月～1976年12月に文部大臣。

## 後記

インタビューに際して、いくつかの著作や年譜等を拝受し、それらを拝見しながら、お話を伺うことができた。藤井先生が取り組まれてきた教育研究活動のすべてを、インタビューで伺うことができなかったのは甚だ残念であった。

拝受した資料を、以下に記して紹介申し上げる。

- ・藤井千之助『迂曲の記 一大正生まれの六十余年―』溪水社、1986年。
- ・藤井千之助『続迂曲の記 ー歴史教育研究五十余年―』溪水社、2001年。
- ・藤井千之助「年譜・研究歴」広島大学退官記念、1986年3月。
- ・「藤井千之助教授 略歴・業績」『広島経済大学研究論集』第21巻第4号、1999年。
- ・田中泉「藤井千之助先生 ー歴史教育研究50余年―」同上所収。

また、「時事問題」のお話の中で拝見したガリ版による1949年のプリントが印象深い。担当者である藤井先生と当時の生徒たちの取り組みの証しの中に、高校の社会科教育の原点を見る思いがした。戦後教育そして社会科教育、歴史教育の出発点における思いを、貴重な資料を拝見しながら、伺うことができたのは、我々、戦後生まれの教師にとって何よりの経験であった。

最後に、お忙しい中をインタビューの申し出に快く応じて下さり、その後の原稿作成段階においても、たびたび有益なご教示を下さった藤井千之助先生に心から感謝申し上げます。

(文責：茨木)

正誤表

「歴史教育体験を聞く 藤井千之助先生」『歴史教育史研究』第3号(2005年度)

頁・行	誤	正
38頁24行目	2年半	3年半